

## 中山間地域共同体の継承と変革に関わる社会教育的研究

——山形県最上郡金山町の内発的發展に着目して——

蜂屋大八

### 1. 本研究の目的と問題の所在

本研究では、中山間地域の地区（集落）において、地域共同体としての良好で濃密な人間関係を構築し、協働の意識を持った地域運営を支えてきた住民活動が内包する学習性を明らかにする。その上で、このような関係性の中で形成された個人が、主体的に地域づくり活動に取り組み、内発的發展に係るキー・パーソンとなっていく過程において、地域共同体の「継承」と「変革」の力がどのように影響したかの視点から検証し、今日的な地域共同体の機能を見出す。かつての村落共同体は、生産と生活の共同性から個人を束縛し、閉鎖性や抑圧が批判されてきたが、戦後の民主化と農地改革によって解体された。一方、縮退社会における地域共同体の在り方や、地方創生における地域活力創造の場面などにおいて、現代の地域共同体はかつての村落共同体とは異なる課題と向き合っている。本研究では、地域社会で形成された住民が、自らが暮らす地域を發展させていこうとする、地域と住民の「相互の関係性」が存在する場として、地域共同体を位置づける。

従来の社会教育学研究では、地域共同体は遅れたものであり、社会教育によって克服すべきものとの捉え方が一般的であった。住民活動への着目は自治公民館を対象とした研究に見られるが、社会教育の地域浸透、全住民が参画する公民館活動を実現するための自治公民館の意義づけであり、住民活動の学習性に着目した研究課題が残されている。このため、本研究では、

従来の研究では十分に展開しきれなかった住民活動の持つ学習性を見出しつつ、現代における自治公民館の積極的位置づけを行う。社会教育学における成人の学習は、行政その他の機関が設定する学習の場への参加と捉えられ、そこへ参加する自発的意志が必要条件であるとみなされてきた。しかし、学習には意図的に行われる場合と、結果として生起する場合があります。意図されない学習が生活の中にいかに存在しているかということを考える必要が感じられる。このため本研究は、従来の社会教育学研究では必ずしも行われてこなかった、日常的な住民活動に内包される意図しない学習や住民の地域意識形成の実態の解明を行う。

また、鶴見和子は内発的發展論で、地域の伝統や自然生態系を等しくする「小さな地域」に住む住民が、多様性を持って、その地域での生活をより良いものにしていくことを提唱した。さらに鶴見は、晩年になって、個体に蓄積した地域の内発性や社会の内発性を地域發展に結びつけて「自己創出」することが内発的發展であると気づいた。地域の中での個人の「自己創出」と地域の内発的發展とを一体として捉える鶴見の視点を採り入れることで、地域共同体の中で形成された個人が、暮らしの中でその地域の發展に貢献するといった「相互の関係性」を捉えることができると考える。本研究では、「自己創出」を社会教育学研究における主体形成の意識変容過程と捉え、従来の内発的發展論が見落としてきたキー・パーソンの主体形成過程を明らかにする。

地域の内発的發展には、そこに住む人々がその地域の中で自分をいかに満足させて生きてい

くかという個人の内発性を根源としつつ、地域の発展と個体としての自分の発展（自己創出）を結びつけて、双方をともに実現しようとする行動への着目が必要と考える。このため本研究では、中山間地域にありながら、住民に意識共有の実態が見られ、自治公民館が自立的な活動を行っている金山町を研究対象地として、住民活動に内包される学習やそこでの地域意識形成の実態の解明を試みる。同時に、地方創生に欠かすことができない地域づくりの主体形成プロセスについて、「相互の関係性」をみる視点を取り入れ、内発的発展の「自己創出」を踏まえて明らかにしていく。

## 2. 研究の方法と課題

本研究では、以下の四つの課題を設定した。

第一に、自治公民館で日常的に行われている住民活動が、地区（集落）内に年齢階梯制の地域の人間形成の仕組みを形作っている実態を明らかにする。第1章において金山町史および各種調査資料に基づき、金山町の特徴的なまちづくりと公民館体制の関係性に関する考察を行うと共に、第2章において自治公民館長（区長）に対するインタビューに基づき、各地区（集落）における住民活動がどのような関係性を持って結びつき、集落の人間形成と関係しているかを捉える。

第二に、住民活動における身体レベルでの触れ合いや相互承認を経て、地域共同体としての意識を持ち、住民の信頼に応え得る人間形成が行われていることを明らかにする。このため、第3章において社会関係資本の概念を用いた実情の分析を行い、第4章においてコモنزの視点から、歴史資料や子供たちの文集等の記述内容に基づく分析を行う。第5章では住民に対するアンケート調査、個別事例の聞き取り調査を組み合わせて、活動に参加する住民の地域意識の変化を分析し、住民活動による地域意識形成の実態を捉える。

第三に、地域共同体の閉鎖性や住民意識を変革させようとするキー・パースン（金山町交流会「耕人舎」）が、どのような学習に基づいて、

地域づくりの主体となったかを明らかにする。このため、第6章と第7章において「耕人舎」メンバーに対するインタビュー、学習活動の記録、各種文献資料に基づき、キー・パースンに対するライフヒストリーの分析を行い、地域づくり意識の形成プロセスを解明する。

第四に、キー・パースンは、地域共同体の閉鎖性や抑圧的体質に改善の必要性を感じつつも、それらを完全に否定せず、地域の現実を直視した活動を行った。第8章において、インタビュー、学習活動の記録、各種文献資料から、彼らの活動と地域共同体との関係性に対して、鶴見和子の内発的発展論に照らして分析し、地域共同体の「継承」と「変革」の力がどのように作用しあって内発的発展を実現してきたのかを明らかにする。

## 3. 研究の概要と成果

本研究の成果は、以下のようによまとめられる。

第一に、金山町の実態に即して言えば、各地区（集落）の自治公民館で行われる多様な住民活動（第2章）において、多くの先達の住民の手で、若年者や活動経験が浅い住民に対する指導や技能の伝授等があり、活動の前後で私的な価値観から公共的な価値観への移行（第3章）が行われていると考えられた。資料分析と住民活動を行った人物の聞き取りから、活動を通じた「人間関係づくり」が「協働の意義」の理解を生み、「地域に対する意識」を肯定的なものへと変容した実態が見出された（第4章）。住民活動では、こうして地域の運営を担う素養や共同体に対する肯定的な価値観を持つ人間が形成されている実態を明らかにした（第5章）。

第二に、こうして形成された地域に対する意識が地域共同体内で蓄積、共有されることで、信頼、互酬性の規範、人間関係などからなる社会関係資本が形成されていると考えられた。インタビューや歴史資料等に基づく地域の実態調査から、地域共同体での住民活動には、セーフティネットとなる関係性や自治・規範意識の形成、次世代継承の仕組みが組み込まれている実態を見出した（第4章）。また、住民に対するア

ンケートの分析では、住民活動への参加によって地域に対する意識が肯定的なものとなり、活動経験（種類）が増えるほど肯定的意識が増加し、物質的な要素より「人間関係」などの質的な要素に豊かさを感じる住民の割合が高くなることを見出された。これらのことから、住民活動には、地域を肯定的に捉えるように意識を変容させる意図しない学習が内包されていることを明らかにした（第5章）。

第三に、歴史や伝統に即して地域が受け継がれてきた金山町のような地域では、このような「継承」の力が強く、保守的で、「変革」の行動を始めることが困難であると考えられた。そのような環境の下で、現状の打開に向けた学習を始めた「耕人舎」のメンバーには、地域に生きることに對する強い意識が見られた（第6章）。障壁にぶつかり、活動の挫折の局面では、この地域に対する強い意識が、活動の継続を促し、かつ、より多くの住民が参画しやすい地域発展への新しい考え方を生み出した（第7章）。内発的発展のキー・パーソンは、地域における様々な事柄を所与の条件とし、正負を問わず、自分を萃点とする曼荼羅の上にそれらの諸要素を配置し、「自己創出」と地域の内発的発展をともに実現できた人物であった。「継承」の力が強く、保守的で「変革」の動きが見えないような地域性がゆえに、強い地域意識を持つキー・パーソンが形成されている実態からは、住民と地域との「相互の関係性」を見出すことができた。

第四に、地域共同体にとっては「変革」の勢力である「耕人舎」の活動だが、その活動は、金山町の地域性を理解し、根底にある「金山町共同体」としての精神の共有までを破壊するものとはならなかった。また、外部の視点（一時漂泊者）を持つ町の実力者（だんな衆）の諒解を得ることができ、多くの町民が参画しやすい開かれた構想となったために、「異端者」とならず、行政や農協の支援を受けた公的な取り組みとなった。地域共同体は、「みんなのもの」である地域を「継承」しようとする力が強いいため、内部に生まれた「変革」の活動が地域の現実と乖離しそうな場面では反発し、活動を制止しよ

うとする。しかし、「変革」の活動に地域を発展させる内容を含み、地域が受容可能な「変革」である場合には、その成果を採り入れて地域共同体の内発的発展を実現するものであることを明らかにした（第8章）。

#### 4. 研究の成果と今後の課題

本研究では、住民活動に内包される意図しない学習の実態を明らかにし、内発的発展のキー・パーソンの主体形成過程との関係から、地域共同体の現代的意義を捉え直そうと試みた。この点については、住民活動に内包される地域の人間形成機能と、そこで形成されたキー・パーソンが、「自己創出」を地域の内発的発展と重ね合わせていく実態を明らかにし、地域共同体を、地域と住民の「相互の関係性」が存在する場として位置づけることで示すことができたと考えている。かつての村落共同体とは異なり、本研究で明らかにしてきた現代の中山間地域の地域共同体には、「個」を否定せず、「個」も共同体を尊重する関係性が見られた。この関係性は、地域共同体の「継承」と「変革」との緊張の上に成り立つものであった。このような側面からの地域共同体の再評価には、近代化の過程で伝統的価値や精神性、社会的規範意識などを失ってしまったことに起因する現代社会の課題を解決し、喪失した社会の秩序を取り戻す際に必要な示唆が含まれているように思われる。この課題については、今後、別の地域の事例との比較・検討を重ね、さらに明確化していきたいと考えている。

（学位取得年月日：平成29年3月24日）